青山御流
活花手引種後篇 三

花山院前内大臣家厚公

花發一日不
開也

家厚

大納言基理卿

賢木葉迩袁之五手
垂之四手然於千代
毋榮由久美留留了
禮之枝　基理

豊前國宇佐宮神寶神代古鈴并戸張
外圖
嵯峨天皇御納物
熊野新宮神寶 平胡籙
摸寫
擧秀謹冩

賢木（さかき）

権中納言基茂卿

希賢君

畫所預従五位上左近衛将監藤原光文

鶯宿梅(あうしゆくばい)
山茶(つばき) 二花

右近衛少將基萬朝臣

希直君

畫所預正五位下土佐守藤原光清

四維時節に草木の道をうつし咲る花なれ
何事も人乃こゝろを慰めて尊ふかくさめさるはなし
その陰を書かるゝも此道をえてこゝろのひらけぬ
色とぞなくさめらるゝひとの眉をひらく事まことに
花を活る業はたゞ心ありけりといふ中にも殊に
さる道は神にも佛にもたむくる法の手向
とのこゝろおこなへてはてはいれのいたりなるをふ
ことに道に基すなはちこゝろにつけてもおもしろきに代々に伝
人乃こゝろりあはれやさしき天保十一とせ
如月むつきなかかたそのつむぎ

菊 きく
神遊び
九輪
希春君
従六位上伊勢介清原挙秀謹画
茱萸囊 しゆうふくろ
公事根源 後成恩寺関白殿下御抄 重陽宴条云 九月九日ハ今日こそ作れハ
菊花の宴行ハるゝ之 中略 御帳の左右に茱萸の嚢をかけ
御前に菊瓶を置またハ茱萸の房を折て頭にさしぬれハ悪
氣をさるとそいふ本文あり
以此御抄案之古昔以来重陽之日茱萸并菊必用之歟漢家其證亦殊多矣
正六位下大外記兼明経博士左衛門大尉中原朝臣章武謹誌
巻之五 〇三

渾入毫
握中
基祥題

古事記の神代乃御巻ニ天香山之五百津眞賢木矣根許士爾許士而於上枝取著八尺勾璁之五百津之御須麻流之玉於中枝取繋八尺鏡於下枝取垂白丹寸手青丹寸手而此種々物者天布刀玉命布刀御幣登取持而とあるを始として今も榊ニ木綿垂附しを玉串といひて皇神にささげ奉るなり、また手向串乃義なるべし、萬葉集に五十串立神酒座奉神主部之とあれ歌乃五十串ハ斎串にて是も玉串なり、神酒瓶子の口に今も青葉をさす古例有 此巻のはじめに故 園乃卿の八卦にも瓶に挿しおけしハ是になん、同集の上総國の防人乃歌ニ庭中乃阿須波乃神ニ小紫さし吾ハいはゝ牟、帰りまるてまであるハ今乃世家ごとに月の始小まつに榊とりそへて小瓶にさし竈の神に奉るを花祭としもいふは是也、花をもて皇神を祭るは書紀乃神代乃御巻ニ伊弉冊尊乃葬りまし紀伊國熊野乃有馬村の土俗の此御魂祭ニハ花時亦以花祭とあるぞ始なるべき、神祇令ニ孟夏三枝祭、義解小率川社祭也以三枝華飾酒樽祭故曰之 西宮
三枝也とある三枝ハ古事記ニ山由理草之名とありて今の百合なり

園の君乃さしおかれし記ニ九月九日以菊瓶立御帳前ニとかきたるハ今乃寫畫乃はじめ是なり、されバ神も君も平人も常に愛でたまふ花にして木ノ花之佐久夜毘賣てふ御名乃さくやハ開光映の意なりといへバ此神の御容儀をもおもひやるべし、これ乃書ハ木草のちなどもをあつめて瓶に挿るさまをすり画巻なれバ正木のかづら末うけて永く花の道のたつきとなりし栄ゆしなりたるおのづから神の御心にもかなひ人もめでたからば幸福あるまぞくこそおもひはべれ

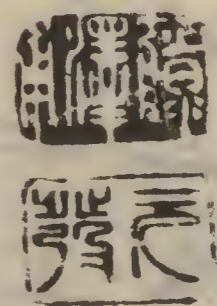
挿られ花のすがたをうつしおきて百千万くえなが世のしるしさ

嘉永の四とせといふとし乃八月の十日あまり五日かくいふも

正五位下陸奥守大中臣富嗣

亞仙亭佳月拜書

江南竹
萬年青 十七葉 三實

御家司職
晴月園 沼尾一叟

瓶花之有式、昔人以畫家寫生
折枝喩之、其意然方有天趣、為
得其堂齋置供、瓶尊殊製、而能
稱其寬窄小大、猶畫家隨屏
障卷軸牋素材質、而能稱焉
長短縱横、求其郭堈、雜錯交
竹臨漪之趣、或論焉、榮辱加品

爵、種種寵光、其賞亦同、但依
其天然、枝葉與假其筆墨丹
粉有以異耳、其依天然者、要
不失其露緑揖日笑嬌嬈之態
出其假者、要爭呈其筆墨
丹粉寫照之外、焉其未必可
稱焉、假其依未必可憑其

真至願其意態有天趣則一
也但依天然者雖其伎倆至
足令人驚絶者不過須刻々
寄興而已不可惜哉是故
製此圖式可以播之四方可以
傳之永年猶奕棋之有譜
令覽者可察其風為乃所

以令學造易着力也又博
索文士品以題及俚案草
弄於律云尓
壬子之暢月攝芝人題

ゆまくの
枝をましへて
花のうち
なり
野山をとりよする
わさ
も
ありけり

隆正

錦章亭 有正
挿之

臘梅 梅茂登木
檜柏 茶梅 菊

雙石寫

花鳥のおしへは

むすひの神のあめつちをつくりはしめ給へることは顯宗天皇のみよにきこえたるひとをつくりはしめ給へるよしは捨遺集のうたにもよめり天地をひらきつくりはしめ給へるかみたちをも梅をもけいこの神をつくりはしめ給ひけるこの神の天つちをつくりはしめ給へるみこゝろをはかりてすつるわざの無某をつくり花をこそはぬるものこそ世の中なりけれ花はそのいろのめぐみきたるはそのこゝろのきよらかなる人のめをよろこばしむるものなれば人のよのある本とおなじくあはれなるところのありがたより花は天をあふぐ者の心にあはれとその心と身のひとつところをおくさむるわざのなくてはあるべきそれ手ふかくすべきはなを花とすることをよくみちしく

しきまたをとてかりそめのこゝろをもてねがふこゝろはゆうなことのしらぬもやうもきやらのこゝろからしときことくなるそむくのことあるべくなりんれのきしたをなをりをこのみてつちはゐくひとこゝろへり梅なとは枝をもよくきりと遠ハそこよりの枝をひらしてこんとしたよくききは法ハ枝をきりてき花をさぬるはるもまるにまくのほかひくべしあるハ木の枝をきるもまくの手足をきることにいへりこれハ本手とくさしつるかとかりをしぬるかりなり木草ハ枝をちらしと人ゑがしきを枝とすこれをえしあるくは手もうらんなるものみなんまさ鳥をとるはいふくこのは花くをふかくききもしく花かみの鳥山を花をかゆりしかりそそなくしところにふたもの家これと

そもそもことりの心をしらぬものなりこのゆゑありや文鳥なと
いふとりハこゝろえてもちゐるそのかへへくむすひのことの
つくり花をさるまゝへるとりなりこれをもて心をなるもちひん
またハ鷹そそハそれとひろくすなはち花とれ稽ちとも逹て
せんことなかるへしまてもあまりかまへくらゐやしぬ
うんきることもちゐていはゆるへからくなしはなのゆゑは
をとりくかなさすかさふるきよりありしことなく
花のときハ花をとりくいはゆるのこゝろにてまたさち
ものハことのもと花の神代の昔より見えたり花のときハ
なるをとりくとあるを見まハ花のなき時ときハ木の葉
をとりくてそまつりぬめはまのなりし神に見え
ときハ木の葉をとてそまつりしなれとて

なりくあれとかのいはゆるこの神ハほとんとすてはまし　まさに
花をめつるこゝろをいれて見るときハ古今集のことはきものを
見えたり野山にゆきて見るハさるものなく又をりとりてかめ
にさしてそのこゝちまて見るもこよなくこゝろをなくさむる
ものなるへし松のみとりハ寿を挿ても瓶にさしても見てこれをその
むへ葉の千とせともいはむものなるへし殊に山にこゝろよせのまつ
よろしくいへりこのころちまとりし近く見るハ五葉これそ子
むすひのこゝろを心にてさかへふりとつりしめさるをるくなるへき
ものなれハ君かつくへ松かうへしへのこゝさなりむすひのこゝろもけふこそぬ
いとめのひめもたるをとりを見るくきそてをりくんをなすきせむなれそ
むすひのこゝろかしこきをあふきまつるめのとりいふへきなり

嘉永四年

野々口隆正しるす

是從須恵乃花乃加多波人之奈乃髙伎低伎遠阿
牙豆羅波受將學乃古伎迩伎尓毛不依花乃時乃
速支遲支迩裳不抱唯墨可伎乃奈礼留任示次寸
遠奈世里加久成畢多屡中尓波冩之繪乃書勝礼
屡裳求自禮止花乃儀乃自然尓刀々乃比多屡左
麻者筆乃行止々加奴及尓奈裳曽波萬邊尓靡出太
屡技宇之呂迩比曽美多留花等八言乃葉尓毛得盡
奴左麻乃見由米礼者徧冩乃登止能比加奴屡毛
最古止和里尓古曽然屡表画工乃心凝之旦藻乃世之
奈礼者將見人思比計旦跡略尓勿見多麻比曽

巻中挿花者の號の傍に國郡を記さゞるものハ皆平安の人なり
他邦の人にかぎりて國郡をしるしたる也

冷泉左衛門督爲理卿

蘭(らに) 三本 二花

嘯月亭雪溪
通稱 大塚茂兵衛 正好

牽午子（あさがほ）

采原齋弘雅
通稱 河村實賢

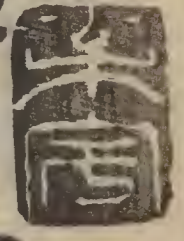
盆山 打雜浪

東雲莽巖
通稱 土岐善右衛門良英

為恭

牡丹（ぼたん） 三花

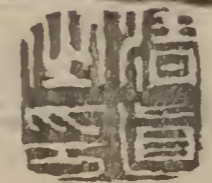
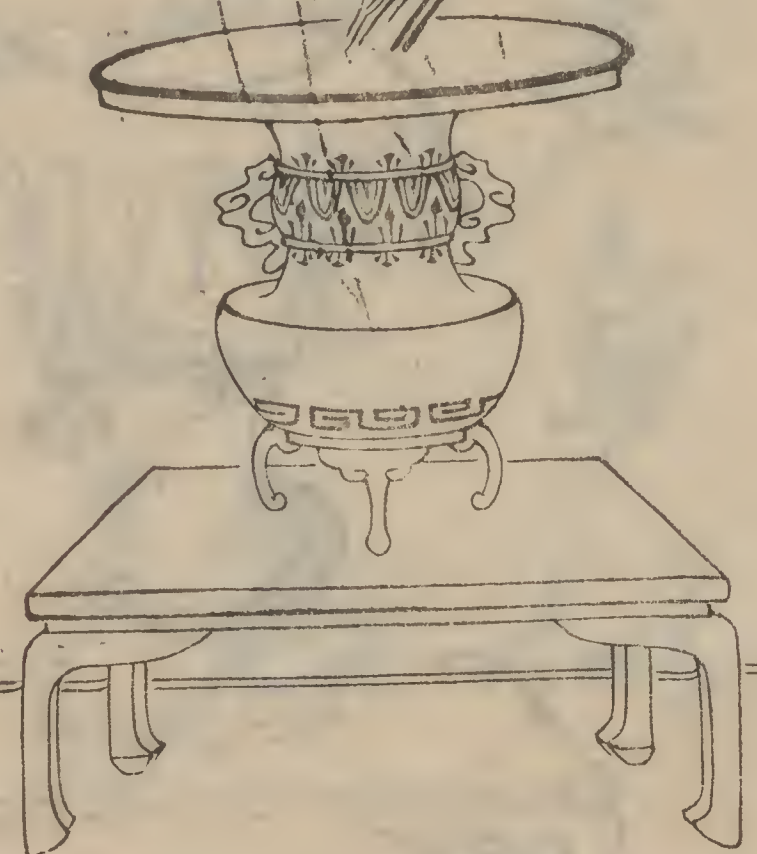
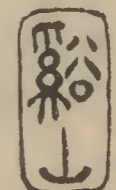
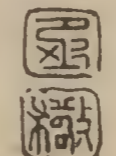
手折まて待すゝ色香は深きかな
咲くらん後の花ぞこの花 大綱

淡海國八幡
照旭亭紫窓
通稱野間甚三郎源義胤

品香評色盡風流
拈筆欲題以自羞
身似書中乾蝴蝶
虚名徒向紙間留

松宇學人題

伏原正二位宣明卿

雪彩氷姿
艶人間孰不
憐将詩漫
莫許個斯真
女儒
梅
清宣明

梅
五鬣松
款冬　三本

御家執司
丞栭亭緣雅
通稱　秋中治部藤原由豫

芭蕉　三本九葉
當流之古傳挿芭蕉必用賢聖圖屛今姑請諸君之詩以代之
太公望
張留侯
諸葛亮
大和國郡山
蓬松亭翠雅
通稱
森村平七橘光寛

一葉（ならん）　十一葉

[illegible]

実[illegible]

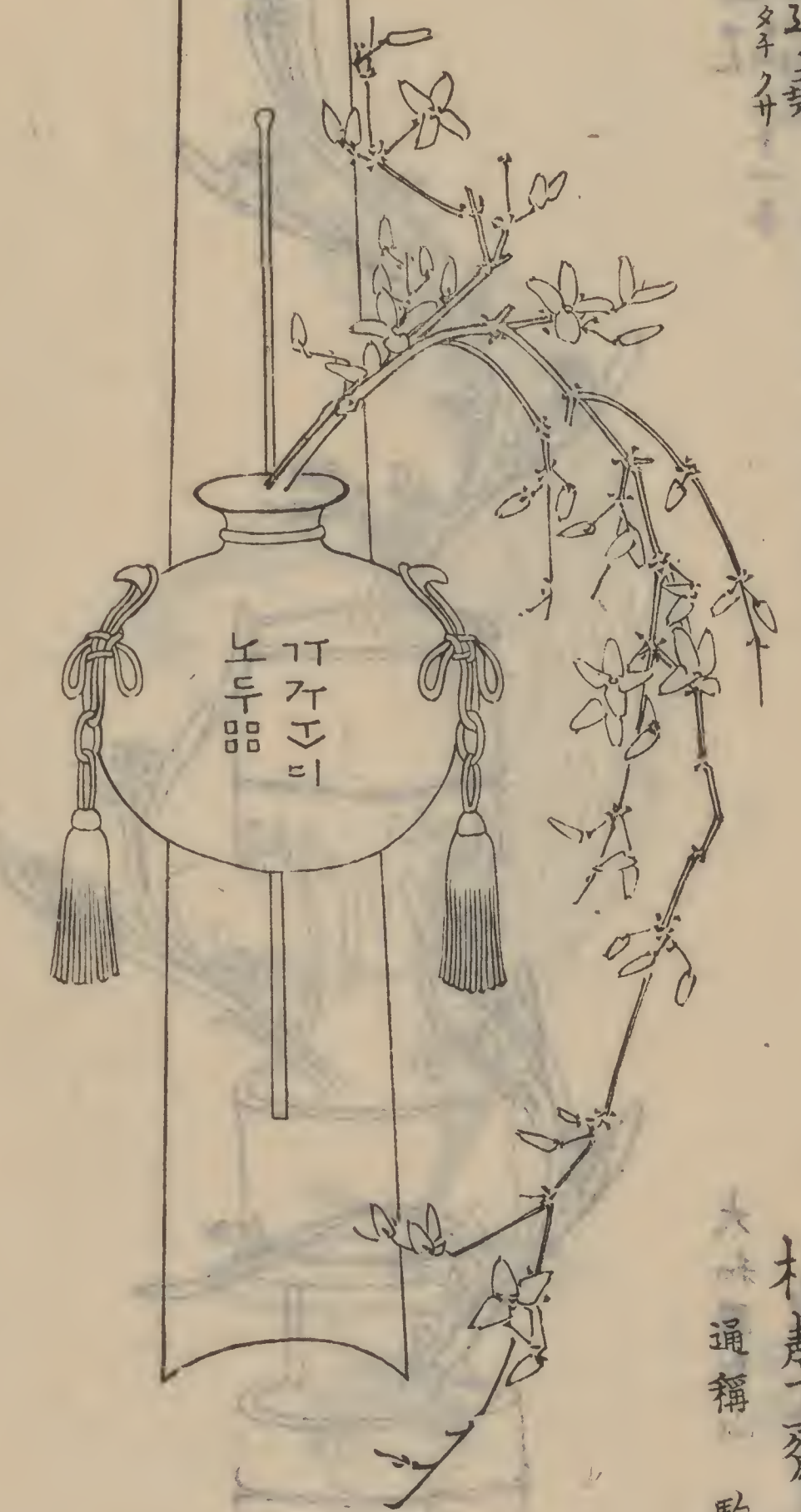
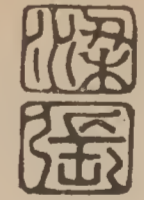
淡海國大津
湘碧亭節月
通稱　大塚嘉右衛門

水仙（すいせん）　二十一本

竹器銘　垂氷三重

三重筒孔挿披出金盞銀臺
寫態宛如見炎法傳秘訣凌
波仙子步文欽　貞蕣

大和國郡山
錦松齋秀雅
通稱　奥西長左衛門

芍薬 紅花 十一輪
土佐國御會頭
衆花亭養雅
高知藩 通稱 近藤新左衛門
連翹 イタチクサ
器 曲玉壺
大和國郡山
松聲齋幽雅
通稱 駒井長九郎

樅
菊 神遊公 廿七編
小きく 塩風
嘉永三年庚戌九月朔日挿於
洛東祇園廟御幸之間
蒼髯亭 岩田雙樹

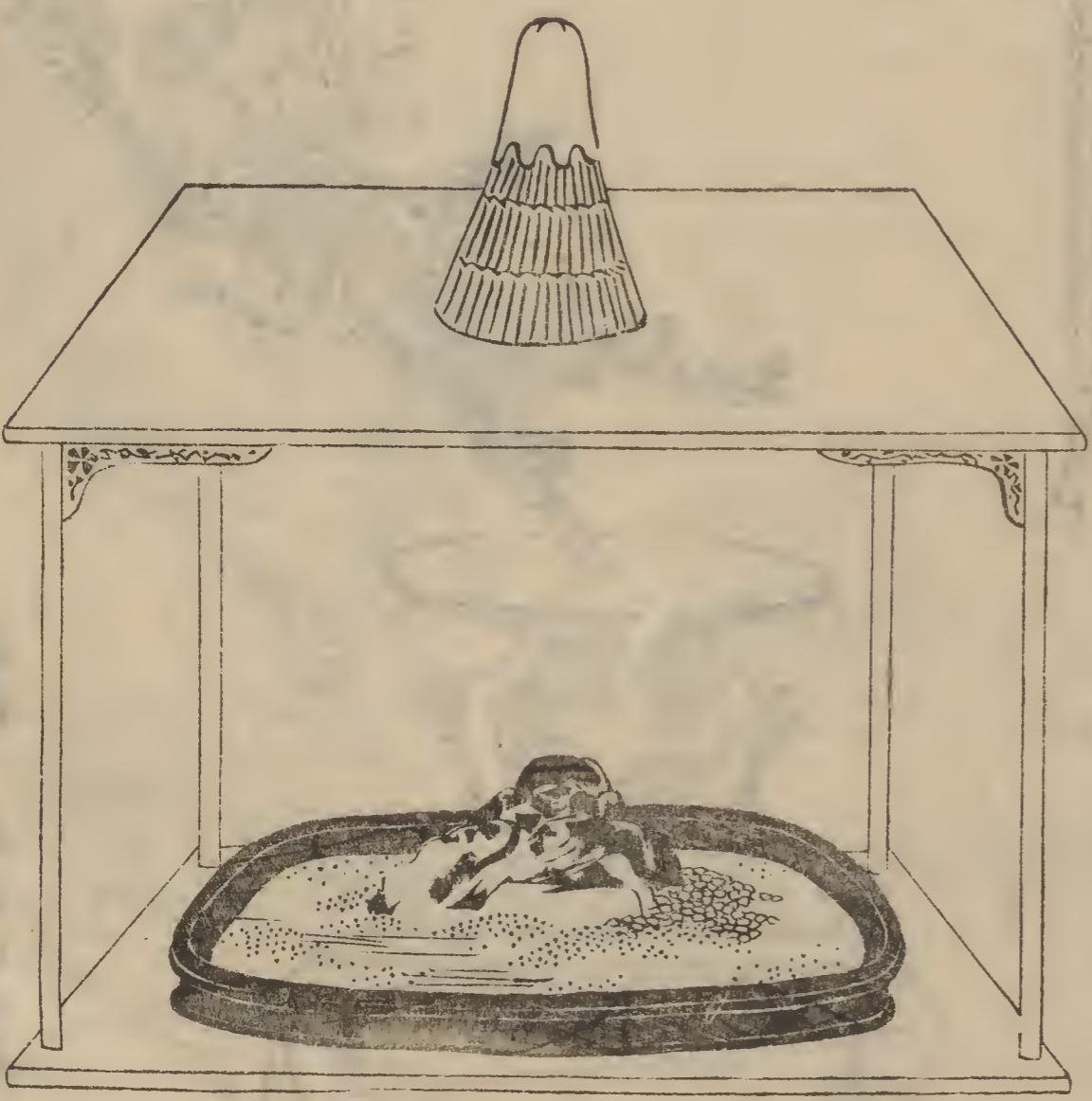
清溪電轉失雲峰夢裏猶驚翠
壖空五嶺莫愁千嶂外九華今
在一壺中天池水落層々見玉
女窗明處々通念我仇池太孤
絕百金歸買碧玲瓏

錄東坡之詩

墨隱齋人大京識

主石　風早實種卿御銘
三芳野

仙人乃すめる洞嶋
そこならし　いさ
ほとこう我まち
なみのみ　秀雄

いつはともなく咲る
まとゐして見る春
入のよいは愛か
花かな　資養

盆山　打春景

岩室䔿燕石
通稱　上田勝三郎

八朔梅
菊 七種

器 山田無雙鑄

鳳松軒秀芝
通稱 橋永武兵衛

蘓鐵
萬年青 七葉 一實

鐵蕉鱗甲從聳䓗子綴輕朵定水
倒漾影躍龍恰攫珠 對君逸人

伊豫國大洲郡中
滴翠齋紅雅
通稱 久保蔦吉

剪綵裁成鮮且枯生
如此滿冊馨箋多摩
芳寛多靈凍宮闕冗
插花經

壬子嘉平月
水石主人示挿花譜索詩因題
塞責　百峰

御家乃萬歳賞

花も花殺の言霊もて形よ青陽を発ち舞ひようひ活いき気象
こと世の人も愛の息ろうる寿る心之もれバそれ
御家もあふ青山のあさもじひとうんに青い天雄ゆるく天の
気やうりせん建を従へ山も孫ゆうて愈国よ四方を囲組なり
かくミ以久ふ代とそれの御流を汲寿茶園せん名也賤民の名
高く豊なる幸きもとの顕も毒ふうえくく枝葉にあやする妻さ
徐う遠近よ咲雁くれる特もぬ功末久よ根芽てんとて如くなる

青山乃寿の栄え操ふそ百ふの栄浪栄ふえともなれ

言霊舎 保之 志るし